

第8・9回資料

調性とその喪失のものがたり

ビデオ：Simon RattleのMCによる“Leaving Home”第1話の冒頭（約15分）

演奏・紹介される曲

Richard Wagner: Tristan und Isolde (1857)

Arnold Schönberg: Verklärte Nacht (1899/1917)

世紀末ウィーン

ビデオ冒頭に登場する人物は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国（旧ハプスブルク帝国）の事実上最後の皇帝 Franz Josef。オーストリアとなぜか日本でいまだに人気のある Elisabeth の舅でもある。

絵画：Gustav Klimt, Oskar Kokoschka, Egon Schiele ほか

文学・思想：Arthur Schnitzler, Hugo von Hofmannsthal, Peter Altenberg, Richard Dehmel, Sigmund Freud, Ernst Mach ほか

キーワード：調性 tonality、遠近法 perspective、社会的階級序列 social hierarchy

Gustav Mahler（音楽）／Gustav Klimt（絵画）／Otto Wagner（建築）の三つ組みにかろうじてまだ残滓として認められた19世紀的な装飾性は、つぎの世代の Arnold Schönberg（音楽）／Egon Schiele（絵画）／Adolf Loos（建築）の三つ組みでは、完全に放棄されることになる。

補足：ところでシェーンベルクは1908年に完成された「弦楽四重奏第2番」の4楽章でついに「調性」のない音楽領域に入ることになる。この作品の作曲の最中、1908年夏、妻 Mathilde が画家 Richard Gerstl と「不倫」、その挙句の駆け落ち騒動が勃発。10月に Mathilde はふたたび夫と子供のもとに戻るが、Gerstl は失意のどん底で11月4日に焼身自殺。この曲はその年の12月21日にロゼー弦楽四重奏団ほかによって初演される。

“Leaving Home”第1話：Dancing on a Volcano（その2：約15分）

演奏される曲

グスタフ・マーラー Gustav Mahler 交響曲第7番 (1905) 第3楽章より

リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss 『エレクトラ』(1908) よりクリュタイムネストラの独白場面

アルノルト・シェーンベルク Arnold Schönberg 『5つの管弦楽曲』作品16 (1909) より

調的和声からその自己崩壊へ、そして……

調的和声における単純な価値形態 (y/x)

協和音はみずからの価値をある不協和音において表現する。

その不協和音は協和音の価値が表現される素材としてある。

*もちろんこれは調的和声のシステムにしか当てはまらないというわけではない。

調的和声における全体的、拡大された価値形態 (y/x)

協和音はみずからの価値をそれぞれの不協和音において表現する。

それらの不協和音は協和音の価値が表現される素材としてある。

*つまり、どの三和音もみずからの価値をそれ以外のすべての三和音において表現する、というわけである。

調的和声における一般的な価値形態その1 (x/x+y)

ある協和音によって媒介された不協和音のいずれもがみずからの価値をその協和音において表現する。

その協和音はそれによって媒介されたすべての不協和音の価値が表現される素材としてある。

*その協和音とはある調のトニックということになる。したがってこの形態はすでに調的和声のシステムを形成していると言えそうだ。したがって、

調的和声における一般的な価値形態その2 (x/x+y)

ある調によって媒介された近親調のいずれもがみずからの価値をその調において表現する。

その調はそれによって媒介されたすべての近親調の価値が表現される素材としてある。

*ここである調は貨幣のように機能していると言えないだろうか。しかしマルクスの言うように資本家は貨幣を得るために商品のえり好みをいっさいしなないとすれば、調的和声における一般的な価値形態もまた、つぎのような形態をとるはずである。

調的和声における究極の(?) 価値形態 (y/x = x/x+y)

ある調はみずからの価値をその他のそれぞれの調において表現する。

それらの調はある調の価値が表現される素材としてある。

そして同時にまた

ある調によって媒介されたその他のすべての調はみずからの価値をその調において表現する。

ある調はそれによって媒介された他のすべての調の価値が表現される素材としてある。

*しかし「その他のそれぞれの調」、「その他のすべての調」がもしも必ずしも「それぞれの近親調」、「すべての近親調」である必要がないとすれば、どうなるだろう。y/x = x/x+y の比率となる〈対象 a〉は、その場合、いまだなお調性 tonality と言えるのだろうか。かろうじてこの式が維持されていると言えそうな音楽は、1908 年以前のシェーンベルクや R. シュトラウスの『エレクトラ』までかもしれない。しかし、すでにどこか不具合があるのも事実である。おそらく調性感らしきものはあっても、そこにはもはや堅固なカデンツ構造はほとんど見出されないはずだからである。じじつシェーンベルクはそういう疑

似調性 pseudo-tonal を蛇蝎のごとく忌み嫌い、無調 atonal という用語すら認めなかった。（「わたしは無調 atonal という表現を拒絶する。」）

かりに無調 atonal なる音楽があるとしたら、それは、 $y/x = y/x+y$ ではなく、 $y/x = x/y$ という式であらわされるかもしれない。ただしその場合、いかなる利潤（剰余価値）もそこからは生まれないし、「調性」による音楽の限界づけはそこではもろくも崩れ去るだろう。

“Leaving Home” 第1話：Dancing on a Volcano（その3：約20分）

演奏される曲

アントン・ヴェーベルン Anton Webern 『管弦楽のための5つの小品』作品10(1913) より

アルバン・ベルク Alban Berg 『ヴァイオリン協奏曲』(1935) より

同時代のドイツ語圏の出来事

1914 第一次世界大戦開戦

1916 フランツ・ヨーゼフ Franz Josef 皇帝の死

1918 第一次世界大戦終戦、オーストリア＝ハンガリー二重帝国解体、ヴァイマル憲法制定

1919 ヴァイマル共和制（1933年、事実上崩壊）

1929 世界恐慌

1933.1.30 アドルフ・ヒトラー Adolf Hitler 首相就任

1933.2.27 国会議事堂放火事件（ベルクの妻 Helene への手紙の中のことば「Dancing on a Volcano」）：共産主義撲滅と一党独裁の地盤を築く。

課題：

$$\frac{y}{x} = \frac{x}{x+y} = a$$

が、無矛盾に成立するような音楽システムとは、どのようなものだと考えられるだろう。

シェーンベルク、ヴェーベルン、ベルクに関する Simon Rattle の解説を参考に考えてみることに。

協和音と不協和和音の差異がなくなったとしても、音楽が一定のシステムだとしたら、つまり音楽が音楽であるためには一定の限界づけが必要だとすれば、それはやはり何らかの差異のシステムとしてあるはずである。